



○風呂敷

風呂敷のイメージ⇒

長崎の浦上天主堂で結婚式に参列したことがあると18号で触れました。この結婚式での浦上天主堂の司祭のお話しがとても心に残ったので今回紹介します。

お話のテーマは風呂敷でした。風呂敷を日常生活の中で目にするのはあまりなくなりました。簡単に表現すると巨大なハンカチのようなもので、物を包み持ち運んだりするためのものです。泥棒のイメージというと、盗んだものを唐草模様の風呂敷に包み背中を背負っている泥棒という人もいます。



話は、夫婦円満の秘訣でした。要旨は次の通りです。

「心というものは、その時々感情によって、いろんな形となります。怒りであれば□や△、とげとげた形、岩のような形。幸せであれば○。弱いときにはスライムのように形にならないこともあります。一方の気持ちが△で、片方の気持ちが○であれば、合わせた時に隙間ができます。いくら大きな○の気持ちで、沈んでいる△の気持ちを包んでも、隙間はいっぱいできます。そうすると、その隙間がわかってもらえていない感情となり、イライラしてくるものです。そんな時に、風呂敷のような心で包み込めば、相手がどんな形の心であっても隙間はできません。また、相手の気持ちやぬくもりが直接伝わってきます。」

ではどうやったら風呂敷のような心を持てるのでしょうか。その話はされたけど覚えていないのか、されなかったか残念ながら記憶がありません。

結婚式での話ではないですが、関連して山嵐の抱擁(「ヤマアラシのジレンマ」)という話があります。

「二匹のヤマアラシが体を温めようとして近づくと、とげで傷つけ合ってしまう。離れると寒い。ヤマアラシは結局、傷つかなくてすむ、互いにいちばん近い所に落ち着く。」というものです。

人間も同じではないでしょうか。互いに、それ以上は踏み込んではいけない領域があります。それを認め合うことから、真の協調関係・信頼関係が生まれます。夫婦関係に置き換えれば、いつも風呂敷の気持ちで、それを上から目線で相手を包み込んであげようと思うとうまいかないこともあるのではないのでしょうか。

風呂敷の心とは、あくまでもお互いが対等の関係であり、相手にあわせて自分の心や接する態度を、相手を気遣って変えていくことが大事で、その上で優しく包みこむ気持ちを持つことだと今は思っています。

そう言えば、小説「坊ちゃん」に、昔の三刀屋高校と同じ旧制中学の数学教師の山嵐が出てきます。正義派で、坊ちゃんに協力してずるがしこい教頭の赤シャツ、同僚の野だいこをこらしめます。この山嵐のネーミングは、坊ちゃんとの心理的距離を表現したものかもしれません…。(実際は柔道の技に由来しているようです。)

ちなみに、風呂敷に少々の穴があったとしても、よほど小さな物でなければ風呂敷からこぼれることはありません。ですが、人は風呂敷やハンカチに穴があれば捨ててしまいます。補修して使うとか、気にせず使うことはほとんどありません。でも、機能の面ではほとんど問題はないはず。これを人にたとえると、それが短所だったりすれば穴ばかりが気になります。「その穴すてきだね」というような人はあまりいません。ですが、短所は長所と表裏一体です。「決断が遅い」という短所も、「じっくり考えることができる」と置き換えれば長所です。そのようにお互いを見ることができるかどうかだと思います。

風呂敷のような心を持つにはどうしたらよいか未だに自分自身の答えは見つかっていませんが、まずは相手をしっかり評価し認めることが大事だと考えています。「よくがんばったね」とよく言います。でも「よく」は抽象的で、相手はその基準がわからず、「いい加減に評価された」ととらえることもあります。具体的に評価することが大事だと思います。そう言いながら、「今日の料理はおいしかった」すら言っていないことを反省する日々です…。